

歯科医師とは、いったい何か？ この問いに、的確な回答を出せる歯科医師は少ない。ある程度年齢を重ねた歯科医師に、講演会などで「歯科医師とは何ですか？」と問うと、「歯科治療をする人」とよく言われる。そこで、「では歯科治療とは何ですか？ 誰が始めたのですか？」と聞くと、みな「ん……」となってしまう。歯学部6年生に同じ質問をすると、国家試験の対策からか、歯科医師法の第一条を答える人が多い。患者さんに至ってはもっとバラバラで、「歯の治療ができる医者」「歯を削る人」、さらには「痛い治療をする人」とまで言われてしまう。

そもそも、歯科医師たる人間の定義ですら、哲学では“人間は考える葦である”とパスカルは言い、ソクラテスは“理性をもった動物”、アリストテレスは“社会的動物”、またフランクリンは“道具を使う動物”と定まらない。物事をみるとき、現象を断面で捉えて哲学的に定義する方法もあるが、時間的流れのなかで、どのような経緯で進化・発展したかを探る方法もある。

一つの考えが、ダーウィンらの提唱した進化論である。ビッグバンから宇宙が生まれ、地球ができ、原核生物から真核生物、そして魚類、両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類のなかから進化して人間となったという見方である。また、ヘッケルらの提唱した発生学では「個体発生は系統発生を繰り返す」とある。母体で育まれる命は、原核生物である精子と卵子の受精から始まり、子宮内で原核生物から魚類などを経て人間になるまでのすべての進化を繰り返すという考えである。

これらと対をなすのが宗教である。宗教には神話があり、「この世の始まりから」のなかで人間が定義されている。聖書では人間は創造主からつくられ、万物の霊長すなわち最も優れたものとされている。古事記など日本の神話では、混沌の世界でさまざまな神（カミ）が生まれ、イザナギとイザナミが国作りをし、その子孫である人間とカミの区別は難しい。ギリシャ神話もこれに似たところがあり、カオス（混沌）からさまざまな神が生まれ、人間になっていった。人間の心の奥深くに残る原始記憶に共通する何かがあるのかもしれない。

たとえ世界中のすべての人がサイエンスを学んだとしても、人間としてのアイデンティティは、その国や宗教の神話時代の歴史から形成される。われわれ日本人も、みなが故郷を懐かしく思い、その地の歴史・遺跡や、人生という名の自分の歴史を振り返る。同じように、歯科医師とは何かを知るには、歯科医学あるいは歯科医療の歴史を学び、いまの歯科医師たる自分が、いったい何であるかを知ることが、正しい歯科治療を実践するために重要ではないだろうか。

ところで、歯科医師の歴史は人類の歴史から比べると極めて浅く、歯科医師の誕生は割と最近の出来事である。歯科医師は、医師のなかの歯科を行う者か、それとも歯科医師と医師は別の者かという命題も歴史を紐解いてみれば答えはみつかるはずである。しかしながら、大学教育において、歯科医師はそもそも医学の歴史すらきちんと教育されていない。いわんや歯科医学においては、である。

本書のコンセプトである「口腔と全身のかかわりからみた未来ある歯科治療」とは、まさにこの医学の黎明期から歯科医学が成り立ち、そして今日に至るまでの歯科治療そのものである。

日本がバブル崩壊後に長く低迷していたのは、戦後になり神話教育と修身教育および敗戦後から現在に至る経緯が義務教育から取り除かれ、日本人としてのアイデンティティがない若年世代が、戦前教育を受けた、あるいは影響された世代を数で上回ったからではないか、といわれる。それと同様に、歯科医師が経済的にも社会的地位でも低迷しているのは、かつて歯科医師が金を槌打して金箔充填用の金を作ったり、木彫で義歯を削ったりした時代の職人としての香具師気質を忘れ、また抗生物質や麻酔のない時代の極めて困難な抜歯から、科学によって麻酔や薬を開発した科学者としての誇りを知らない世代が多数派になったからではないかと、私は思っている。

カルチャーとしての現在の日本の歯科を根底から変えるのは難しいかもしれないが、将来を支える若い歯科医師が本書を読み、歯科医療界のリーダーとしてのアイデンティティを獲得することを強く期待してやまない。

(2014年12月 吉野敏明)